慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「再葬墓」と「周溝墓」の接点 : 南関東地方を中心に
Sub Title	Saisobo (re-buried burial) and Shukobo (burial enclosed by square ditch) ; with the special reference to their cultural continuity
Author	山岸, 良二(Yamagishi, Ryoji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.2 (1982. 9) ,p.83(247)- 93(257)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820900-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「再葬墓」と「周溝墓」の接点

――南関東地方を中心に――

山岸良二

第一章　はじめに

東国における弥生文化の成立状況を墓制面より考える時、所謂須和田期を中心とした、北関東・東関東以北に分布する「再葬墓」の分析が今日まで重点を成してきた。ところがこの「再葬墓」から一時期遅れて出現してくるといわれる「方形周溝墓」との関連を正面より採り上げた論考は未だ数少ない。

杉原荘介[1]は、天神前遺跡の調査報告書のまとめをしめくくるにあたり「南関東地方においては、なんと言っても再葬墓は在来の墓制であり、周溝墓は外来の墓制である。それらは、同じ共同体村落を表徴しているものであるか、その中でどういう変化が起ったものであろうか、今後の興味ある課題」であると提示している。

これをうけて、星田享二[2]は「東日本への農耕文化の伝播が、当時の人々の生活様式にいかなる影響を及ぼしたか、また、東日本における、方形周溝墓出現の意義を追求する一手順」として、「保守的な墓制をも短期間のうちに変化せしめた要因」としての「生産様式の変化（農耕技術の導入）」を再葬墓の研究から検討しようとした。

その結果「関東地方における初期の方形周溝墓出現と再葬墓風習の終焉とは全く別の出来事」であり、この問題を解決するためには、小田原式土器論の分析が課題となってくるとした。

一方、笹田裕[3]は「再葬墓」、の「墓制自体は祭祀的性格より、未だ呪術的性格の方が強」く、初期方形周溝墓は「内的には共同という概念を持ち、呪術から祭祀へと移行していく過程を象徴している」とし、「畿内の先進的文化の移入ないし、畿内の何らかの権力下における方形周溝墓の出現に伴って再葬墓つまり、後進的文化ないし権力が退化されてしまっ」たと考え、「再葬墓は歴史的には方形周溝墓の出現によって消滅する」とした。

以上の経過をふまえて、本論は、方形周溝墓と再葬墓との比較・検討により西方より進出した方形周溝墓制の関東出現の意義を

小察しようとするものである。

第二章　「再葬墓」と「周溝墓」の様態

「再葬墓」とは「東日本[4]における弥生時代の初期に、特に農耕文化の波及期に多くみられる一種の洗骨葬」で「死者を土葬、または風葬で白骨化させ、それを洗骨し、容器―普通大型の甕形・鉢形土器（量的に極めて少ない）、小型の壺形土器、さらには人面付土器（一つの墓域においても、かなりかぎられた数値を示す）―に納骨して、岩陰または円形の小竪穴（墓壙）を穿ち、そこに数個（一個の場合もある）埋置」する墓制が一般概念として提示されている。

これに対して、「方形周溝墓[1]」とは、溝により区画された墓域内（溝内をも含めて）墓壙を設ける墓制で、時折底部・胴部穿孔土器を溝中に置き、他に特徴的な副葬品はほとんどみとめられない。北海道・沖縄を除くほぼ汎日本的な分布を示し畿内で弥生時代前期に発生し、古墳時代中期まで一部地方で継続する。関東地方には、弥生時代中期後半に伝播したと考えられる。

それでは、両者の関係はどのようになっているのであろうか。この章では、主に関東地方における「再葬墓」と初期「方形周溝墓」（宮ノ台期）を、いくつかの視点より比較してみたい。

①　分布

表1のように「再葬墓」は、その中心が北関東〜東北南部にあり、現在の行政区分でいう群馬・栃木・茨城・福島の各県に多く発見されている。注目すべき点は旧武蔵国[2]（埼玉・東京）内における発見例が極端に少ないことである。一方、表2のように、初期方形周溝墓を検出した遺跡は、東京湾沿岸地域に片寄っており、主に東京湾西岸と同東岸の大きく二グループに分けることが出来る。しかも鶴見川流域に比較的濃密な分布が認められ、出土する土器群も若干古手の様相を見せていることが注目される。

ここで注意したいことは、相模湾沿岸地域には今日迄発見例がない点であり、伊豆半島を挟んでの伝播経路が今後の解明に対して大きなポイントになってくると思われる。

②　立地

「再葬墓」の立地は、一般に「台地[5]の末端段丘の上面、山地の崖陰などに」営まれており、「その規模において、かなり差が存在するようである。これは、彼らが受け入れた農耕技術と、それに取り組もうとする労働力編成の問題、そして、それをとりまく自然環境に大きく規制」されていたと思われる。

一方、初期「方形周溝墓」は鶴見川流域では「沖積地[6]を見下す台地上」に主たる立地があり、同様の傾向は千葉県内の主要遺跡にもみとめられる。しかるに、東京湾内奥部の伊皿子・山王両遺跡では海岸線際の崖上に小基　数のみ検出されるという少々異なる様態を示している。

又、集落との関連では、「再葬墓」に伴う確実な類例は今日迄未発見であり、一方「周溝墓」を伴う集落例は近年顕著なものがいくつか発見されている。この現状をまとめたものとして、千葉県

第表1　主な再葬墓及びそれに類似する墓址一覧（関東地方）

県		遺跡名	遺構形態・数	時期	副葬品	備考
茨城	①	女方	小竪穴41	中期初頭	碧玉　管玉38 石斧2 石包丁　剝片	縄文より つづく
	②	殿内	小竪穴10	中期初頭	剝片（頁岩）	縄文より つづく
	③	小野天神前	小竪穴21	中期初頭	石鏃　凹石 石斧	人面付3 個体
	④	台ノ内				
	⑤	海後	堀込4	中期初頭		土器 14個体
	⑥	堂ノ入	小竪穴1（？）	中期		
	⑦	中台	小竪穴1（？）	中期		
栃木	⑧	出流原	小竪穴38	中期	碧玉　管玉46 石鏃3 石製模造品1	土器 100個体 以上
	⑨	上仙波	小竪穴10	中期(須和田)	剝片(チャート) (頁岩) 環状石器	
	⑩	野沢		中期（野沢 須和田）	管玉　勾玉 石鏃	
	⑪	柴工業団地	小竪穴6	中期前半	石鏃　臼玉2 子持勾玉　1	
群馬	⑫	上久保	小竪穴1	中期		打製石斧 （？）
	⑬	岩櫃山	堀込3	中期（須和田 丸子）	剝片（頁岩黒耀 石	土器 20個体
埼玉	⑭	四十坂	小竪穴	中期(須和田)		大洞系の工 字文をもつ
	⑮	上敷免	小竪穴2（？）	中期(須和田)	管玉	縄文より 続く
	⑯	飯塚		中期(須和田)	管玉	
千葉	⑰	天神前	小竪穴9	中期(須和田)	環状石器 碧玉　管玉	土器20個 体
	⑱	新田山	数個	中期(須和田)		土器4個 体
	⑲	船子		中期(須和田)		土器4個 体
	⑳	中野台		中期(小田原)		土器2個 体
神奈川	㉑	遊ケ崎		中期(須和田)		
	㉒	岡津古久	小竪穴8	中期(須和田)	石鏃10　剝片 打製石斧	
	㉓	三ケ木		中期(須和田)		土器9個 体
	㉔	平沢		中期(須和田)		壺中より 幼児骨

※　星田享二・熊野正也・小柳正子の論文より作製

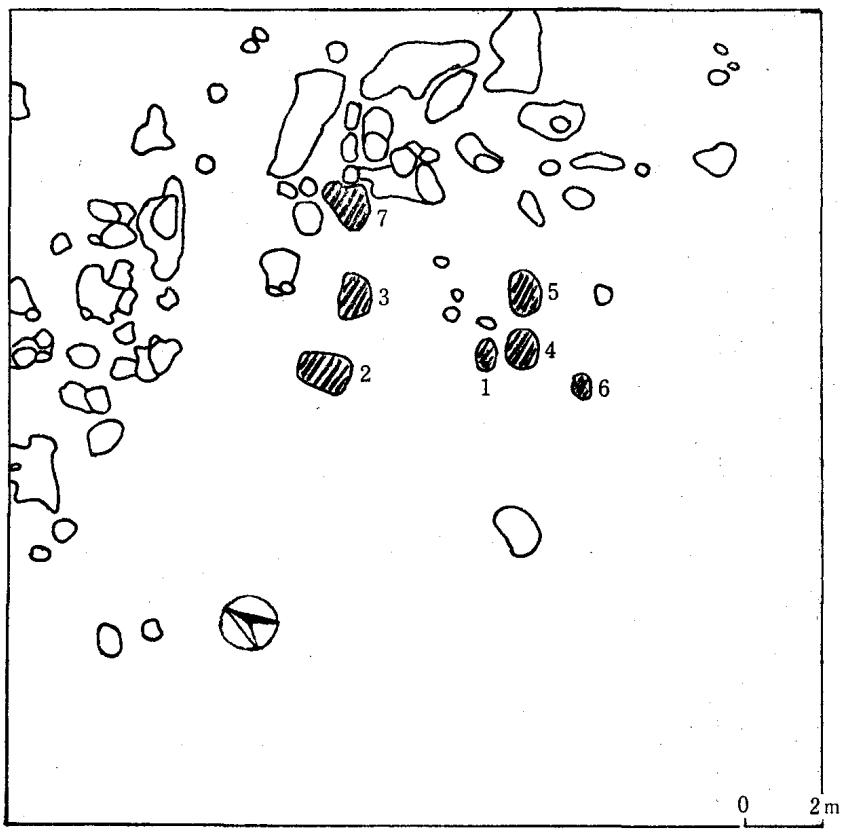
第2表　関東初現期の方形周溝墓遺跡一覧

県	遺跡名	遺構数	副葬品
埼玉	① 諏訪山	1 基	壺形（須和田）
千葉	② 南総中	14 基	
	③ 菊間	2 基	
	④ 大厩	1 基	
	⑤ 御林跡	1 基	※ 再葬墓（宮ノ台）を伴う
	⑥ 星久喜	1 基	
	⑦ 大崎台	9 基	
	⑧ 寺崎（向原A）	40＋α 基	
	⑨ 道庭	80基以上	
東京	⑩ 伊皿子	2 基	
	⑪ 山王	1（？）基	
神奈川	⑫ 歳勝土	28 基	
	⑬ 三殿台	1 基	
	⑭ 朝光寺原	18 基	
	⑮ 荏田№12	1 基	
	⑯ 佐江戸宮原	2 基	※ 宮ノ台～弥生町
	⑰ 上倉田	2 基	
	⑱ 井田伊勢台	2 基	

内の宮ノ台期を四期に編年分けし「第一期[7]は、立地が沖積地に臨む低地で、住居と方形周溝墓という構成をもつ。第二期は、立地が台地上に移り、居住域と墓域が環濠に囲まれるという集落構成をもつ。第三期も第二期と同様の立地状態を示し、居住域を環濠が囲み、併存して墓域という集落構成をもつ。第四期は明確には確認されていないが、V字溝は構築されなくなり、住居と墓域？という集落構成をもつ。」とする試案が示されている。

③　時期

「再葬墓」の風習が盛んになる時期は、土器型式で「南関東地方[8]では須和田式土器、北関東地方では岩櫃山式土器、女方式土器・野沢Ⅰ・Ⅱ式土器」等であり、これらは関東地方弥生時代の初期に位置づけられるものである。しかしながら、この須和田式土器の概念については今日、幾多の混乱があり、判然としていな



〈1図〉 千葉県天神前遺跡　平面図

い。同型式の命名者杉原は、近年[9]「北関東の最古の弥生式土器」は「岩櫃山式土器と須和田式土器A類」で、「前者は中部地方の土器とともに、櫛刃文を主体とし、水神平式土器に母体があり、後者は菱形繋留文を主体とし、荒海式土器（大洞A′式土器）に母体があり、それぞれ晩期縄文式土器から直接に移化した」と須和田式をA・B二類に分化し、B類が広く南関東全域に拡大していくとした。しかし、同型式は「結局[10]、墓址で捉えられたものであり、生活址において捉えられたものではな」い点に不可避的な弱点をもち、それはこの須和田式に続くとされる所謂、小田原式土器の概念規定にも少なからず影響を与えている。

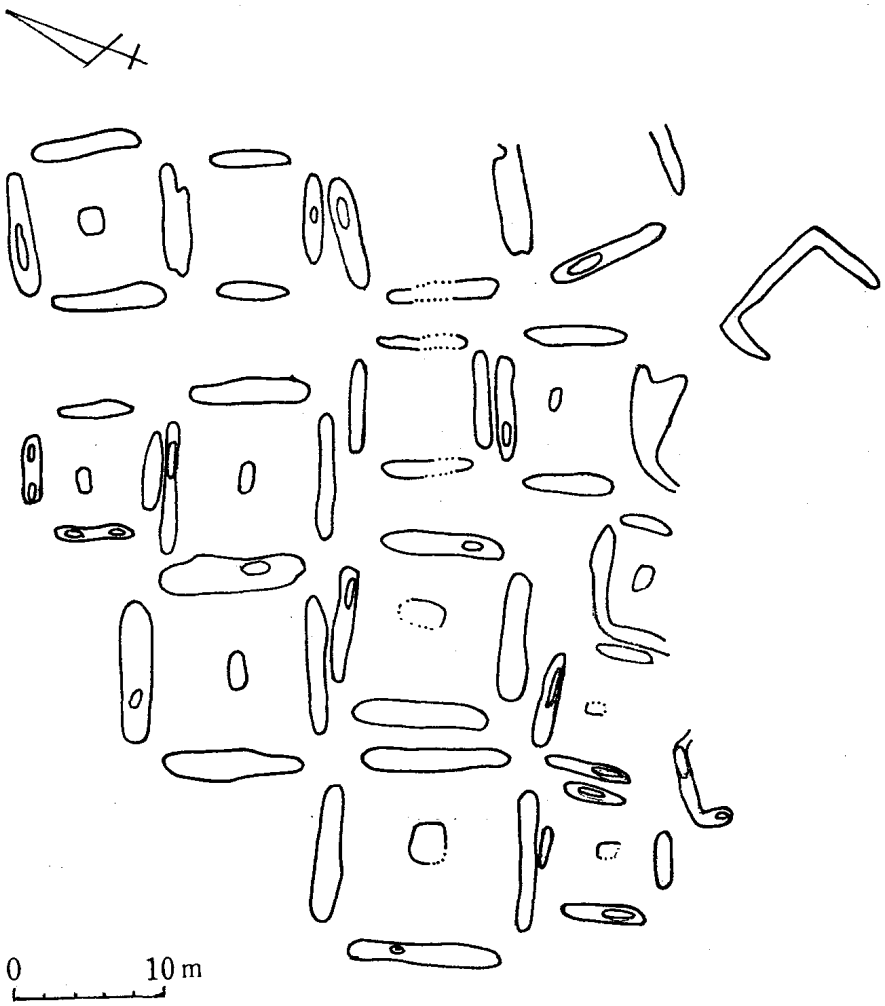
ともかくも、「再葬墓」より出土する土器群は、時期的には弥生時代中期に比定される一群を下限としている。

一方、「方形周溝墓」の上限は埼玉県諏訪山遺跡で須和田式の特徴をもつ壺形土器が溝中より検出されているが、溝も不明確な上、須和田土器の取り扱いにも問題点が残るため、即座に同時期の所産とするわけにはいかない。やはり、後章で触れる伝播経路等を考慮し、宮ノ台期に代表される弥生時代中期後半に初現を考えたい。

④　平面形態とあり方

「再葬墓」の調査例中には、全面調査されたものが殆どないため、その実態は不明確である。しかし、四十近くの小竪穴が検出された栃木県出流原遺跡や多数の土器が出土した群馬県岩櫃山遺跡などでは、教グループ毎のまとまりが推察されている。これらのまとまりを「いくつか[11]の居住単位集団の共有する聖地であり、いくつかの小竪穴のまとまりは、それぞれ各居住単位集団の占地する墓地（墓域）であった」とする考えも出されている。

宮ノ台期の「方形周溝墓」は、大きく二つのあり方に分類出来る。つまり、集団墓的な様相をもつ神奈川県歳勝土遺跡、千葉県寺崎遺跡等のグループと、一～二基しか検出されない神奈川県佐



〈2図〉　神奈川県歳勝土遺跡　平面図（一部）

江戸宮原遺跡、東京都伊皿子遺跡等のグループである。両者共、個々の平面形態は四隅の切れる凵形を原則的には成しているが、前者のグループは、駿河湾地方の初現的なあり方（静岡県二本松遺跡例）を踏襲しているもので、関東へ一番早く進出してきた集団のものと考えられる。

⑤　立面形態と埋葬施設

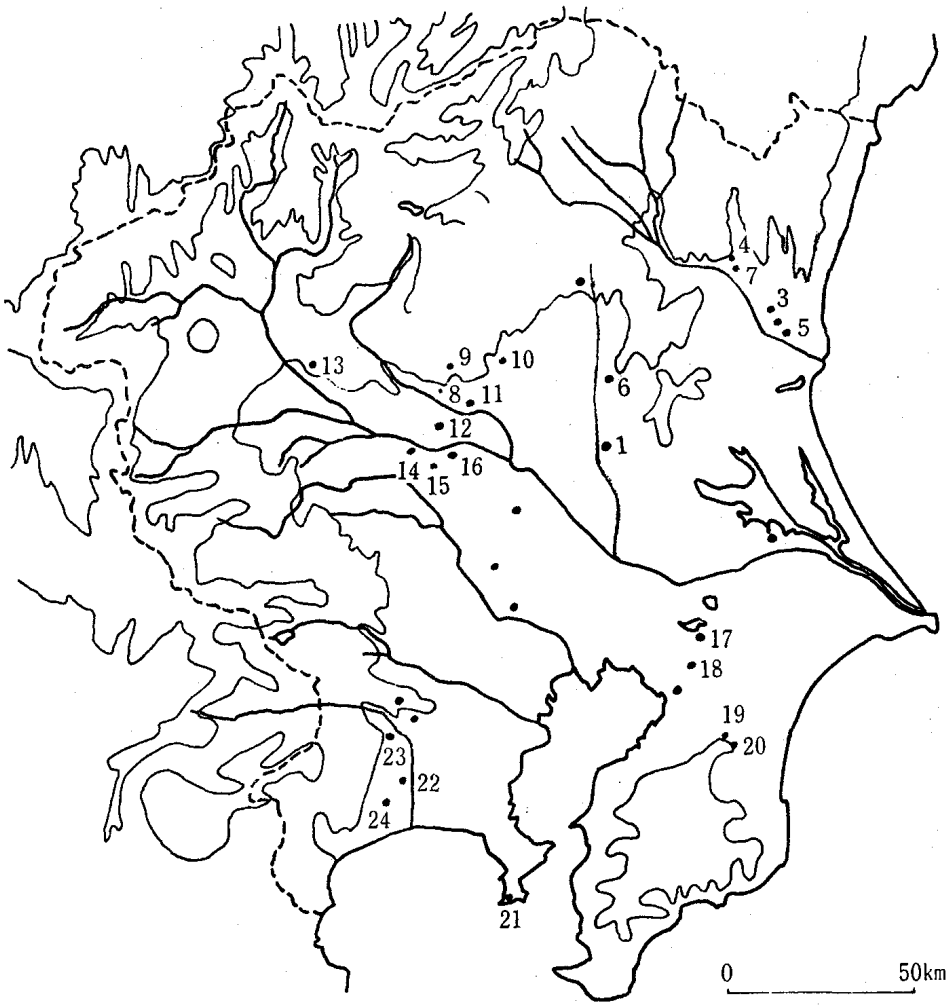
「再葬墓」では、各竪穴に一～十個体の土器が埋置され、原則的には一土器一遺体であったと思われるが、稀に一遺体二土器に分れていたり、二遺体の部分骨が一土器に入っている例もある。出土した人骨のほとんどが、成人で四〇歳前後までと思われ、このことから「一世代[12]の期間は短かく、一つの共同墓地に、長く続いたものでは三、四世代の集落の住民が埋葬されていた」と考えられ、この村落の同時人口は約三十人前後と推測される。

しかし、各土壙ともほんの数例を除けば、重複することもなく穿たれていることから、埋置・埋土後に何らかの墓標、もしくは意図的な盛土があったと考えられる。

「方形周溝墓」の盛土については、大阪府瓜生堂遺跡例が大変有名になり、どの周溝墓にも盛土があったように喧伝されているが、宮ノ台期は先の項でも述べた如く、四周を独立した溝で区画する形態であり、溝のあげ土を方台部に全てあげたとしてもその量[13]は盛土といえる程のものかどうか疑問である。

一方、埋葬施設は原則的に一方形周溝墓＝一土壙が中央に穿たれているが、時折周溝内にも土壙もしくは土器棺にて、補助的な埋葬部をつくっている例もある。これらの主体部以外の土器棺を

「再葬墓」の残存形態とみなす考え方もあるが、畿内の方形周溝墓にも数多く見られる現象であり、直ちにその意見に首肯することは出来ない。



〈3図〉 再葬墓及びそれに類似する墓址

⑤ 出土遺物

「再葬墓」の代表的出土遺物は、土器を除けば、副葬された形で出土する玉類（碧玉製管玉・勾玉等）と頁岩等(14)の剝片である。玉の出土数はほぼ小竪穴数に比例しているようである。さらに、人面付土器との関連で栃木県出流原遺跡のように三つのグループに分けることの出来る例もある。すなわち「碧玉製管玉(13)を副葬品として入れている納骨器を埋置している小竪穴・人面付土器を埋置している小竪穴・副葬品を何も入れていない納骨器だけを埋置している小竪穴」の三グループである。

星田は分析をさらにすすめて「各居住単位集団の長――生産・祭祀・交易その他諸々の居住単位集団の生活維持活動に際し、リーダー的な存在であったろう――的性格の人物の洗骨に際して、碧玉製管玉の副葬」が行なわれたとしつつも、これら三グループの「施設上の差、または土器（納骨器）それ自体の差は全く認められず、碧玉製管玉の副葬の有無をもって、階級社会の崩芽などということは認め難く、かなり呪術的な性格を帯た副葬品」であることを強調している。

確かに、宮ノ台期のみならず全時期を通じて、「方形周溝墓」には土器を除く副葬品はほとんどみとめられない。その意味からも「再葬墓」における玉類及び縄文時代の遺制を残す打製石斧・石鏃類の出土はそれぞれの墓制の社会背景を考える上で注意すべき

点であろう。

第三章　「周溝墓」の東国進出

再葬墓の源流をどこに求めるか、という命題に対して、小柳正子[14]は杉原に代表される『縄文文化伝統説』と星田に代表される『弥生文化東漸説』[15]の二説に一応分類した。

前者は「この再葬墓という特殊な埋葬儀礼が縄文時代晩期における一部の墓制からの発展であることはすでに福島県成田遺跡の例から説明し得たところであるが、なお茨城県殿内遺跡や新潟県六野瀬遺跡における如く、それが縄文時代晩期終末の遺跡と密着していることからも立証できるであろう。」とする杉原の考えに立脚し、須和田式土器の文様形態が東北地方晩期縄文土器の大洞A′式にもとめられる点が傍証となっている。

一方、後者は「愛知県小牛牧遺跡[16]でみられる縄文時代晩期の墓制（洗骨葬と考えられるが、壺形土器はまだ参画していない）が、農耕技術を導入した段階において、農耕祭祀と密接な結びつきをもって（この段階で壺形土器が参画すると考えられる）生まれてきた墓制」とする考えで、須和田式土器の文様表出技法・整形技法等で共通する中部地方の条痕文系の土器群を分析した結果出てきたものである。この二説に対して星田自身は全く縄文文化からの伝統を無視しているわけではないとのコメント[17]を述べているが、要はどの地域の土器に文様構成・文様形態等の根源の比重をおくかの問題であろう。

しかるに、尾張平野周辺においても、弥生時代の初期を代表する樫王水神平式土器[18]について種々の見解が古くから示されているが、その中で一連の土器棺の内「樫王式以後岩滑式期にかけて顕著な壺棺」を再葬墓のひとつと考える、つまり、星田説を補強する提言[19]も近年なされている。

このように混沌としている再葬墓の関東地方への現出状況と比べて方形周溝墓のそれはだいぶ近年の調査例増加に伴い光明が見えてきている。

弥生前期後半に畿内に出現したこの墓制はその後東漸し、中期代には伊勢湾沿岸から駿河湾沿岸、そして中期代後半に南関東へ入ってくる。

南関東への進出ルート[5]は、今日迄の遺跡分布をみる限り次の仮説が成り立つ。

伊豆半島北西部より海路東京湾内湾の東西へ入ったとする説（Aルート）と、伊豆半島北西部より海路三浦半島東北部に入り、ワンステップおいて東京湾を渡ったとする説（Bルート）である。

これらの仮説立脚の根拠は、第一に、遺跡の分布状況にある。前章でみてきたように宮ノ台期の方形周溝墓が東京湾西岸では鶴見川流域部に集中し、東岸では市原・佐倉付近の二カ所に集中している点である。さらに、興味深い点は、相模川流域に今日迄宮ノ台期の方形周溝墓が未発見であるだけでなく、方形周溝墓遺跡自体の絶対数も少ない点[6]である。

第二に、尾張平野から駿河湾沿岸地域に出現してくる初期の方形周溝墓群のあり方は、四隅の切れた区画が原則的には一区画一主体をもち、集団で短期間に基数を増加させていくパターンであ

ノ台式に先行する小田原式と呼称される一群の土器があるが、これについては否定的な意見も強く、その実像は明確ではない。しかも、小田原式のみを出土した周溝墓例の報告は稀少であり不明な点も多い。

千葉県内の弥生集落をまとめた千葉県文化財センター員グループ[20]は、東京湾東岸地域では集落構成より宮ノ台期を四期に編年し、土器自体は大きく三様相に分かれると提言している。さらに、小田原式期は、宮ノ台式期に包括されるという考えも示されている。土器論は本旨ではないが、西岸に比べ、東岸の遺跡がやはりワンステップ遅れるようである。

〈4図〉 宮ノ台期方形周溝墓遺跡

第四章　画期としての宮ノ台期

関東における弥生文化の成立＝農耕社会のスタートを、いつの時期と把えるかという議論は古くより数多く提言されてきた。その後遺跡数の急激な増加に伴い、従前の分布状況も土器の型式学的研究等も何回かの曲折を経なければならなかった。しかるに、杉原[21]がかつて提唱した弥生文化第二次波及期と呼ばれる、宮ノ台式土器期に当地方で一つの画期があったとする考えは今日ほぼ固まってきたようである。

り、このパターンと類似する遺跡は現在のところ先にあげた地域の内鶴見川流域及び佐倉市周辺の養老川流域にのみ限定されている。

第三に、宮ノ台式土器の問題である。前章でも触れたように宮

墓制面における再葬墓と方形周溝墓には、先にみてきたように類似現象があるものの、根源的には全く元を異にする墓制であり、その源流も、伝播ルートも全く別途のものである。さらに、推察をするならば、宮ノ台期の方形周溝墓が初めて鶴見川流域に築かれた頃、北関東では再葬墓制が未だ営まれていた可能性が充分ある。つまり「関東地方[22]における初期の方形周溝墓出現と再葬墓風習の終焉とは全く別の出来事であったという可能性が充分に考えられる」ということである。

宮ノ台式土器を保有し、方形周溝墓制を慣習とし、農業耕作用の諸道具（石器のみならず鉄器類も）を保持した集団は、西より関東へ進出するに当り、在地勢力及び後出勢力との間に数多くの葛藤を覚悟していた事は、宮ノ台期の集落にみとめられる環濠等からも十二分に推察される。このため当地方への定着化にはだいぶ紆余曲折があったのであろう。

「再葬墓」に使用される土器を縄文土器とは言い難いものの、その墓制形態の本質性は所詮縄文時代の遺制であり、農耕社会の所産とはいえない。関東における農耕社会の明確な成立は、宮ノ台期に「方形周溝墓」を築造する集団が進出してきた時にはじまり、同時期内にかなり高度な水稲耕作が進展していったことがうかがえる。つまり「方形周溝墓」は南関東における農耕社会成立の表徴といえるのである。

本稿を草するに当り原史墓制研究会会員諸氏には、いつもながら数多くのご援助を賜わった。また、清書、トレース等については東邦大学付属東邦高校考古学研究会（猪田晶子、大野好子、小林昌子、船戸美香、寺坂順子）の諸姉にご尽力をお願いした。

尚、本稿は筆者が授与された『昭和五十五年度東邦大学額田奨学金』（方形周溝墓の研究）の成果の一部である。

註

① 方形周溝墓についての詳細は、『原史墓制研究』一～五、及び拙著『方形周溝墓』昭和五十六年を参照されたい。

② 岡本孝之は須和田式・宮ノ台式を併存で把え、それぞれ限定された地域内での使用を論じている。「東日本先史時代末期の評価（1）～（5）」『考古学ジャーナル』97～102、昭和四十九年

③ 周溝内の土量がどの程度のものか、現在迄具体的に論及した者はいない。近い将来筆者らがまとめる予定である。

④ これ以外に、チャート、グリーンタフ、黒耀石等がある。

⑤ 伊豆大島にても、底部穿孔土器が溝状の落ち込みより出土しており、海上交通がこの時代かなり活発だったことが窺える。

⑥ 遺跡数の多少は調査密度に依るのは言うまでもないが、この地域は山地・半島という条件により、進出が遅れたと思われる。

〈参考文献〉

（1） 杉原荘介・大塚初重『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』　昭和四十九年

（2） 星田享二「東日本弥生時代初頭の土器と葬制」―再葬墓の

研究―　『史館』七・昭和五十一年
(3) 笹田裕「再葬墓から方形周溝墓へ」『金鈴』二十二、昭和五十五年
(4) (2)に同じ
(5) (1)に同じ
(6) 佐江戸遺跡調査会『宮原』、昭和五十一年
(7) 千葉県文化財センター『研究紀要3、考古学から見た房総文化・弥生時代』、昭和五十三年
(8) (2)に同じ
(9) 茨城県歴史館『特別展　東日本の弥生土器』―初期弥生土器の系譜―　昭和五十六年
(10) (2)に同じ
(11) (2)に同じ
(12) (2)に同じ
(13) (2)に同じ
(14) 小柳正子「複葬に関する一考察」―再葬墓の特性を中心として―　『史館』十一　昭和五十四年
(15) (1)に同じ
(16) (2)に同じ
(17) 星田享二「小柳論文に対するコメント」『史館』十一　昭和五十四年
(18) 大参義一、紅村弘らの一連の研究がある。代表的なもの、紅村弘・増子康真『東海先史文化の諸段階』資料編Ⅱ　昭和五十三年
(19) 石川日出志「東海地方西部の樫王・水神平式期をめぐる問題」『考古学研究』二八―一、昭和五十六年　尚、同論文は次の論文に対する反論である。松井和幸「中部地方における農耕社会の成立について」―土器および墓制の変化を中心に―『考古学研究』二七―三、昭和五十五年
(20) (7)に同じ
(21) 杉原荘介「日本農耕文化の生成」『日本農耕文化の生成』昭和三十六年
(22) (2)に同じ